（様式１）

学力向上のための重点プラン【小学校】

新宿区立西戸山小学校

■　学校の共通目標

授業作り	重点	学習指導要領の改討の趣旨を踏まえ、各教科等において、育成したい資質・能力を明確にし、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図っていく。	中間評価		最終評価	
環境作り		時間や場所の制約に対してＩＣＴの活用や、効率化を図り、先行研究に触れながら実践研究を行い指導力の向上に努める。				

■　学年の取組内容

学年	教科	学習状況の分析（10 月）	課　題（10 月）	改善のための取組（10 月）	最終評価（２月）
1	国語				
	算数				

学年	教科	学習状況の分析（４月）	課　題（４月）	改善のための取組（４月）	中間評価・追加する取組（10 月）	最終評価（２月）
2	国語	学スピーチ活動や、話し合いの機会は環境を整えて取り組むようにしている。話し手の方を向いてスピーチしたり、聞くルールを浸透させたりすることにより、相手を意識して話す・聞くことができるようにする。 学読書活動を積極的に取り入れているが、登場人物の気持ちを想像できるようにするための学習が必要である。 学日記を書かせているが、一文や二文で終わる傾向がある。 学家庭学習の提出率は 90%を超えており、100%を目指して取り組んでいる。	・自分の考えを、順序を意識しながら話をする力を育てること。 ・物語文については、場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像する力を育てること。 ・自分の思うことや感じていることを日記に書く習慣を育てること。	・順序を表す言葉に着目して読んだり、構成カードを用いて書いたりすることで、順序を意識できるようにする。 ・音読や辞書引きに取り組むことで、語彙を増やし、内容読解力を高める。 ・日記に取り組むことで文章力を高める。 ・言葉に着目して読み、想像したことを書き込むようなワークシートや板書を工夫することで、読みを深められるようにする。 ・タブレット端末を活用して国語の漢字の基礎基本の定着を図る。		
	算数	学毎日計算に取り組むことで多くの児童に計算の定着が見られる。しかし、たし算やひき算がまだ定着しきれていない状況が一部で見られる。 学ICT を活用して、問題場面を視覚的に提示したことが、問題の理解につながった。さらに加法、減法の意味を理解し、問題場面や式の意味を理解する力を育てる必要がある。	・算数のたし算、ひき算の筆算の基本的な技能を身に付けること。 ・加法、減法の意味を理解し、問題場面や式の意味を理解する力を育てること。	・具体物の操作や図で表現する活動を通して、加法、減法の意味を理解させるとともに、筆算の技能を身につけさせる。その際、ICT 機器を有効的に活用する。 ・タブレット端末を活用して算数の計算の基礎基本の定着を図る。また、繰り上がりが繰り下がりでつまずかないように、繰り返し指導をする。		
3	国語	学令和３年度に実施した新宿区学力定着度調査では、教科全体の正答率は 82.9%で、目標値を 6.0 ポイント上回っていた。 学同調査「文章を書く項目」では、目標値 80%に対して、正答率は 59.3%であった。	・経験したことや想像したことなどから書くことを見付け，正しい表現技法で文章を書くこと。 ・テストにおける無回答率が高い問題があること。特に、記述式の問題の無回答率が高いこと。	・日記の取組を毎日行うことで文章を書く習慣を身に着ける。 ・デジタルドリル等を活用し、興味をもって、漢字やことわざなどの練習を行えるようにする。 ・書く目的を明確にして、相手意識をもって文章を書く回数を増やしていく。		
	算数	学令和３年度に実施した新宿区学力定着度調査では、教科全体の正答率が 79.5%で、目標値を 8.6 ポイント上回った。観点別に正答率を見ると、すべての項目で目標値に達している。中でも、「思考・判断・表現」が 71.0%で、目標値を 14.7 ポイント上回った。	・筆算の繰り上がりなど、計算の仕組みを十分に理解すること。 ・立式の仕方を正しく理解しておらず、乗数と被乗数の関係性を表せないこと。	・日常的に、生活と算数を関連付ける場面を通して、知識を活用できる場面を意図的に増やしていく。 ・乗法の問題を作ったり、文章問題を図に表したりする活動を行うことを通して、乗法の意味を理解させるようにしていく。		

4	国語	学令和３年度に実施した新宿区学力定着度調査「言葉の学習」の項目では、漢字の音読みと訓読みについての観点で正答率は目標値 65%に対して、正答率は 47.1%であった。 学同調査「説明文の内容を読み取る」の項目では、叙述を基に文章の内容を捉える観点について正答率は目標値 75%に対して、正答率 58.8%であった。	・漢字の音読みと訓読みについて正しく理解したり適切に活用したりすること。 ・叙述を基に文章の内容を適切に捉えること。	・授業において、漢字や言葉の意味を意図的に調べる活動を取り入れ、読み書きに慣れ親しむ。また、書く活動の中では、熟語だけに着目するのではなく、前後の文脈の中で、使い方も押さえられるよう指導を図る。 ・説明文の指導の際に、それぞれの段落で何を述べているのか、中心は何か、といった段落ごとの要点を押さえる学習場面を設定する。また、段落の中で中心になる文を見付けたり、それがいくつかの文にわたっているときには一文にまとめたりする活動も繰り返し行う。		
	算数	学令和３年度に実施した新宿区学力定着度調査では、教科全体の正答率が 69.8%で、目標値を 2.9 ポイント上回った。観点別に正答率を見ると、すべての項目で目標値に達している。中でも、「知識・技能」が 76.4%で、目標値を 2.9 ポイント上回った。 学４けた－３けた＝３けたの計算に課題が見られた。減法の計算問題では、計算するけた数が増えると、位がずれる、繰り下がりがあることを忘れて計算するなどの間違いがみられる。	・身近にあるものの量の大きさを推察して、適切な単位を用いて表現できるようにすること。 ・中学年までに学習する計算技能を定着させること。	・日常でよく使うものや身の回りにあるものを通して、重さの基本的な量の大きさの感覚を豊かにできるよう、振り返り、活用場面の充実を図る。 ・方眼のマス目を意識して計算に取り組むこと、繰り下がったときには、被減数を斜め線で消すなど、計算の過程をひとつひとつ確認して進める。		
5	国語	学令和３年度に実施した新宿区学力定着度調査では、教科全体の正答率が 71.6%で、目標値を 4.1 ポイント上回った。観点別に正答率を見ると、すべての項目で目標値に達している。中でも、「思考・判断・表現」が 69.9%で、目標値を 7.2 ポイント上回った。	・中学年までに配当されている漢字を正しく書くこと。漢字を文中で正しく書くことができること。 ・文の構成を考え、指定された長さで文章を書くこと。	・国語科の漢字指導の際に小テストを繰り返し行い、習熟を図る。テスト前にデジタルドリルを活用し習熟を図る。 ・他教科の書く活動などの中でも、既習漢字を文中で使うように指導する。また、文章を長く書くときに見通しが持てるように、メモを活用し文の構成を考えさせる。		
	算数	学令和３年度に実施した新宿区学力定着度調査では、教科全体の正答率が 68.8%で、目標値を 3.3 ポイント上回った。すべての項目で目標値に達している。中でも、「思考・判断・表現」が 61.5%で、目標値を 6.15%で、目標値を 6.0 ポイント上回った。	・垂直、平行な直線やいろいろな四角形を正しく書けるようにすること。 ・大きな数や概数を正確に表すこと。	・図形指導ではデジタル教科書を活用し模範解答を提示しながら、操作的活動を取り入れ図形への理解を深めていく。 ・デジタルドリルを活用し、個の課題に応じて繰り返し概数の処理ができる課題に取り組ませる。 ・マス目を意識したノート指導を丁寧に行い、計算等のケアレスミスを防ぐように指導する。		
6	国語	学令和３年度に実施した新宿区学力定着度調査では、教科全体の正答率が 72.4%で、目標値を 3.9 ポイント上回った。観点別に正答率を見ると、すべての項目で目標値に達している。中でも、「思考・判断・表現」が 74.0%で、目標値を 6.3 ポイント上回った。	・指定された長さで文章を書くこと。 ・第５学年までに配当されている漢字を正しく読むこと。 ・話し合いの内容を聞き取ること。	・読書活動を充実させ、漢字を読んだり文字数を指定して要約させたりする経験を積ませる。 ・相手意識をもって正しく文章を書く活動を取り入れ、既習の漢字についての習熟を図る。 ・話の内容を明確に捉えられるよう、話し手の目的や自分の聞こうとする意図を意識して聞かせる。		
	算数	学令和３年度に実施した新宿区学力定着度調査では、教科全体の正答率が 73.2%で、目標値を 10.0 ポイント上回った。観点別に正答率を見ると、すべての項目で目標値に達している。中でも、「主体的に学習に取り組む態度」が 60.6%で、目標値を 12.7 ポイント上回った。	・小学校で学習した基礎的な知識や計算技能などを確実に身に付けること。	・デジタルドリルや教科書「ふりかえろう」の活用をし、既習事項を繰り返したり、立ち返ったりする指導を取り入れる。 ・家庭学習は、個の課題に応じて分量や内容を変える工夫をする。		
音楽		学自己評価や学習感想、発表を通して、友達の表現の工夫や良さに気付き、自分の感じ方や考え方を広げて、意欲的に取り組む姿が多く見られるようになった。	・音楽的な見方・考え方を働かせ、自分の思いや意図を表現すること。	・グループでの活動や発表を通して、意見を交流する場面を多くつくることにより、自他の違いや共通点に気付き、自分の考えに自信をもち根拠をもって表現できるようにする。		
図工		学鑑賞のポイントをおさえ、よさや違いを感じさせる場面を増やすことにより、個人の表現に活かせるようになってきた。	・自分らしさを生かしてデザインを考えること。 ・見通しをもって活動すること。	・デザインを考える時は、タブレット端末なども使い幅広く資料を集められるようにする。 ・大きな活動の流れをあらかじめ提示し、意識させる。		
特支		学特別支援教育コーディネーターや、特別支援教室専門員が、日頃から児童の様子や対応について共通理解したり、話し合ったりすることで、担任の特別支援教育に対する理解が深まった。 学必要に応じて校内委員会を開催することにより、対応が迅速になった。また、巡回相談を有効活用するために、日頃から情報収集に取り組んだ。	・教職員の特別支援教育に対する一層の理解を深めるために、担任と巡回教員との連携を強化すること。	・特別支援教育コーディネーターと特別支援教室専門員が在籍学級での様子や実態、まなびの教室での様子を共有していくようにする。 ・生活指導夕会を活用し、学級内の特別支援を必要とする児童の学校全体で情報を共有していくようにする。		